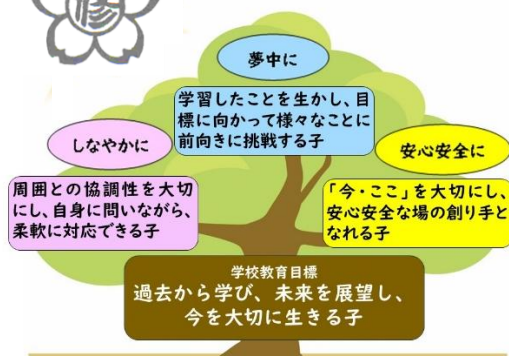




たくさんの「笑顔」「夢」「ありがとう」が集まる学校

令和8年 10月5日
京都市立修学院小学校
校長 鎌田 賢二



校長室だより「こころ」NO.51

大人が少し離れたところで、子どもは動き出す

一か月前の話ですが、5年山の家宿泊学習。大自然の懷に抱かれた数日間を通じて、子どもたちのたくましく、そして瑞々しい成長の姿をたくさん見ましたが、なかなか言葉にできなくて今頃になってしまいました。

特に印象的だったのは、野外炊事のひとコマです。煙に目をパチパチしながら必死に薪に火をつけようとする子、野菜の下ごしらえに慎重に包丁を握る子。手元には、何度もめくられて少し汚れた「しおり」がありました。大人の指示を待つのではなく、自分たちでしおりの言葉を一生懸命に読み込み、「次はこれ切るね!」「風送ってみようか!」と自然に声を掛け合い、知恵を出し合って目の前のことに夢中になっていました。夜のキャンプファイヤーでも、用意された段取りをただこなすのではなく、燃え上がる炎を囲みながら、心の底からその瞬間を純粋に楽しむ子どもたちの笑顔が広がっていました。大人が先回りして手取り足取り教えるのをやめ、少し離れたところで見守っていたとき、子どもたちは自分たちだけの力で関係性を紡ぎ、場を動かし始めていたのです。

子どもが自ら考え、判断し、動き出す力、いわゆる「自走する力」は最初から「自由にやっていいよ」と丸投げして生まれるものではありません。それは自由ではなく、ただの放置になってしまいます。心理学者のピーター・グレイは、子どもたちが自分たちだけで過ごす時間の中にこそ「人と生きていくための力を磨く場」があり、その土台には大人からの「信頼」があるのだと述べています。山道を励まし合いながら歩ききった経験や、大人と一緒に安心できる場を築いてきた時間。「自分たちは信じてもらえている」「見守られている」という確かな安心感の土台があるからこそ、大人が一步引いたときに、子どもたちは恐れずに自分の足で踏み出すことができるのだと感じます。

普段の教室や家庭では、時間割や日課に追われ、大人はつい「予定通りに、安全に、効率よく進めなければ」と、知らず知らずのうちに先回りして指示を出し、子どもたちの間の余白を埋めてしまいがちです。その点、自然という思い通りにいかない環境に身を置く野外活動は、大人にとっても「あえて手を出さずに見守る余白」を持つための、かけがえのない指導機会だと感じます。火がつかなくても、段取りが狂っても、すぐに大人が手を出さずにぐっとこらえる。その「信じて待つ余白」があるからこそ、しおりを読み、仲間と語り合い、自分たちの力で解決する喜びを味わうことができます。（創造的余白とでもいいでしょうか。）

「大人が指示を出しすぎて、子どもが考える隙間を埋めていないだろうか」

「失敗を避けさせようと、先回りして答えを手渡していないだろうか」

「子どもたちの可能性を信じ、じっと待つ余白」を大切にできているだろうか」

山の家で子どもたちが見せてくれたあの真剣な眼差しや弾ける笑顔は、野外活動という特別な場だけでなく、学校での日々の授業や、家庭・地域での暮らしの中でも同じように生まれるはず。大人が敷いたレールを歩かせるのではなく、子どもたちが自らの力で火をおこし、歩き出せるように。これからは学校・家庭・地域が手を携え、毎日は無理であっても子どもたちを温かく信じ、「一步下がって見守る余白」を共に大切に育んでいけたらと思います。



余白ができるとどんないいことがありますか？